歌の周辺

わが家には作業用の梯子が一挺あった。ふだんは納屋に仕舞ってあったが、時たま父が屋根に昇る用事などで取り出して使った。その梯子が、仕舞い忘れて、家の裏に立てかけられたままになっていたことがあった。夜、その光景を見ると、梯子がまるで銀河へ昇ってゆく小さな通路のように見えた。後年になって、当時のおぼろな記憶を手繰り寄せて詠んだのがこの一首である。

なお、動詞「忘る」は下二段で活用するのが普通だが、古代には四段活用もあったので、それに従った。　（高野公彦）

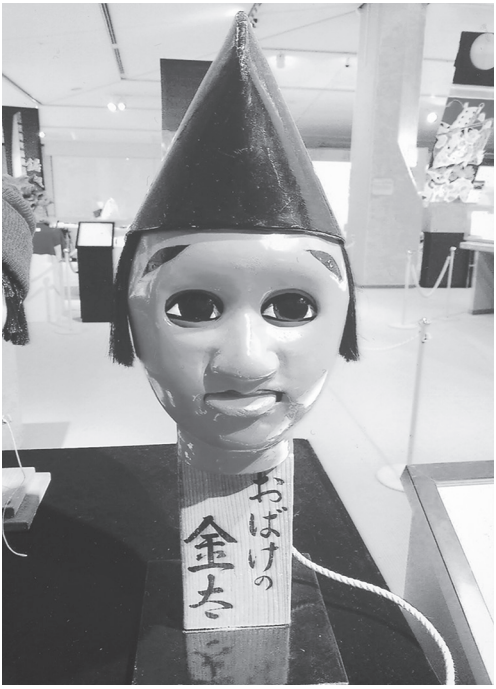
（写真・木畑紀子）

高野公彦うた紀行・23

家裏に立てて忘られて梯子あり銀河は一夜その上に輝（て）る

――『汽水の光』

【鑑賞】近景の家裏の梯子と遠景の銀河を合わせて、無言劇の舞台のような空間を提示、銀河の美しい一夜を詠む。仄かな寂しさと緩やかな時間の流れが心地よい。誰かが何かの目的で梯子を立て、翌朝片付けることを暗示しているので、読者はこの時空間での物語を創作できる。裏庭の柿捥ぎ、屋根の修理、屋根での星空観望や花火見物、夜盗の侵入・逃亡など。（中津川勒坐）



ふるさとコレクション——194

おばけの金太（熊本県熊本市）

郷土玩具の「おばけの金太」は，黒い烏帽子に真っ赤な顔，どんぐり眼をしたからくり人形である。紐を引くと目玉がひっくり返り，長い舌をペロリと出すカラクリが仕掛けられている。熊本で十代続く人形師の厚賀新八郎さんの先祖，五代目西陣屋彦七が江戸後期に考案したとされる。モデルは加藤清正に仕えていた足軽の金太である。熊本城築城の際，連日の重労働で疲れ切った人夫をおどけた仕種で笑わせていた人気者で,「おどけの金太」と呼ばれていたという。顔が真っ赤なのは酒を飲んでいるためというのが定説であるが，疫病などから男の子を守る魔よけの意味もあったといわれている。

がらりと表情が変わるこのからくりが，見た人を驚かせることから，いつの頃からか「おばけの金太」と呼ばれるようになった。

最近では，フィンランドのデザイナーとコラボし，北欧風に化けた朱赤や白い金太「Mr. Tongue」も作られている。

（写真・解説：新屋　希子）